

同好会「国病仲良し会」の紹介

畑上貞雄

国病仲良し会の始点は古く、記憶を辿ると国立大村病院と称した頃に、10名程の職員が友好を深め研鑽を積むため、職種や性別を越えて集まった交流会(単なる飲み会)で、大村病院時の採用者が主でした。当時は良き時代で、時の院長が樹木を大切にされ、施設敷地全体が庭園(「しのざき公園」と称していた)でしたので、環境美化作業が挙って職員によって定例的に行われていました。また、運動も盛んで、退庁後、体育館はバトミントン、運動場は外科医長の音頭でソフトボールの打撃と守備、テニスコートは内野守備、渡り廊下は投球練習を行う等交流の場は多々で、必然的にグループが出来たように思います。大村病院も長崎中央病院、更に、長崎医療センターと改称されるなか、全ての職種に渡って管内国立病院の発展と自己研鑽を目指すための交流人事異動が多くなり、転出した者も退職後に帰郷し、大村に居住する等も増加し、慰労と歓迎を兼ねて開らいています。

現在も明文化した会則はありませんが、毎年大村公園の菖蒲が見頃の時期の水曜日に集まっています。会員条件はかつて長崎医療センターに在職し、大村市近郊に居住していて楽しく飲んで過去を多弁に語ることの好きな人なら誰でも入会出来ます。ちなみに現在会員は18名です。